



ピッポ新聞

2013

2

No.265

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ
編集者 伊藤俊男

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その3)

通りにはトラム(市電)やトロリーバスが、ひんぱんに行きかっている。両側の歩道はアーケードだ。これが少し変わっていて、建物の1階部分がアーケードになっているのだ。それがどこまでも続いて、重厚さを感じるものだった。

その通りを右や左に渡り歩きながらみやげもの屋などをひやかし、孫の聖奈ちゃんと、萌奈ちゃんに小さなスプーンを1本ずつ買った。

さらに通りを進んでいくと、時計塔が現れ、その先には牢獄塔と呼ばれる名所も出てきた。



「名前はガイドブックで後から確認した」この牢獄塔を過ぎると、左側の広場のよう

になっていた。花や果物・野菜・チーズなどを売っている露店がいくつか出ていた。この広場の露店という風景は、ヨーロッパの街角に多く見られるが、ぼくはこれが好きだ。

テントを覗き回り、ブルーベリーの盛り合わせを6フランで買った。その量たるや、日本のスーパーの倍以上はあるだろうか。さらにいうと、日本では石油化学製品のトレイなどがほとんどだが、ここでは、少し厚手の紙を舟形に折ったものに入れられていた。

そういえば、かつて日本でも経木でできたものに惣菜などを量り売りしていたものだったが、経木と量り売りは、いつごろから消えてしまったのだろうか。駅弁も経木の折り箱が定番だったが、あの折り箱は杉などで作られていたのだろうか、ぼくはあの香りと、折り箱の底にくっついた飯粒をはがして食べるのが好きだった。あれに比べ、最近の駅弁は材料が豪華だけど夢がなく、味もまずいのは入れ物のせいではないかしら。

ヨーロッパと日本の環境に対する考え方の違いを、こんなところでも感じる。

買ったブルーベリーを持って、レストランの野外のテーブルに座った。すぐに女性が注文を取りにきたので、「コーヒー」を注文した。4フランと少し(380円くらい)だった。ブルーベリーをテーブルに置いて、つまみながらコーヒーを飲んだ。ちょうど昼どきだったので、野外のテーブルは客でほぼ埋まっ

ていた。多くは観光客のようだが、ここには日本人は少なかつた。

それにしても、西洋人は男も女も、よく食べ、よく飲み、よくしゃべるな！

そろそろ駅にもどろつかないか。

先ほどの野外のレストランで食事をしたかったのだが、何を注文していいのか言葉のハンディーを考えたら、注文する勇気が出なかつた。それに、「Cafe Please」はかんたんで、誰にも通じるからね。

駅に戻って、建物の一角にセルフサービスのレストランを見つけた。ここで昼食をとることにしよう。これなら、目の前のさまざまなお料理から自分で選ぶことができるので、ほくには都合良かった。周りの客の様子を見て、どうやればよいのかを理解した。まず皿をもって、自分の食べたい料理を好きな量とり、カウンターの持つて行く係が料理の重さを量り、その重量で代金を支払うシステムのようにだ。料理の種類によって値段が違うということはないようで、ぼくの料金は17フランと少々(日本円で1500円くらい)だった。

いよいよツエルマットに到着

午後1時7分ツエルマットへ向けてベルンを後にした。途中フィスプでのりかえてツエルマットまで約2時間半の旅だ。午後4時少し前にツエルマットに到着した。ここに7泊し、3つの4千メートル峰と、いくつかの八

イキングコースを歩く「予定」だ。

ツエルマットの駅前で真っ先に目についたのは、箱型の電気自動車のタクシーと馬車だった。通りは多くの人であふれていた。

まず探すのは、山岳ガイド組合だ。駅前通りの右側の方向が繁華街(バーンホフ通り)になっていて、ガイド組合もその方向にある。聞いてはいたが、日本人旅行者がやたら多い。通りはみやげもの屋と、レストランと、チョコ



コレートの店

時計を売る店
ホテルなどが
並んでいた。

そんな中、
駅から5分ほ
どの通りの右
側にガイド組
合の建物をみ
つけた。事務
所は2階で窓
口には2人の
女性がいた。
1人は応対中
だったので、

もう一人に声をかけた。明後日プライベートホテルへのガイドをお願いしたいと言ったら、印刷した紙を渡された。それには日本語でそれぞれの山のガイド料やおおよその往復に要する時間と、その山の特徴などが書かれていた。グループガイドとプライベートガイドの料金

が書かれていて、プライベートの方が3倍くらい高いようだ。ぼくはもちろんグループガイドの方だ。

彼女から聞かれたのは、宿泊するホテルの名と電話番号と、氏名だけだった。そして、明日の夕方もう一度来てくれという。ぼくは「OK」といって、窓口を後にした。彼女の対応は簡単で、時間も5分くらいのものであった。こんなのでいいのかな？という物足りなさを感じた。

そうだった、一つだけこちらから聞いたことがあったのだけ。予約しているホテルの住所を示して、ここからどう行けばよいのか聞いたのた。チューリッヒのようなことがあつてはいけないから

ツエルマットの駅前通り



ね。彼女の説明によれば、前の通りをさらに右に進むと教会があるからそこを左に曲がって橋を渡って少し行けばホテルがあるといふ。ガイド組合のすぐ先で通りは少

し狭くなったが、同じように両側にはレストラン、みやげもの屋、ホテルなどが並んでいた。教会の場所はすぐわかり、これを左に折れると、ガイド組合の女性が言ったように橋があった。

橋の上には、カメラを構えた日本人観光客が群れていた。そのカメラの方向を見ると、そこには「マッターホルン」が下の部分だけ顔を出していた。上部は雲に隠れていて、全容を見ることはできないが、その岩峰をぼくが見間違はずもないのだ。このピッポ新聞の題字の一部にも使っているほど、ぼくはこの山に憧れを抱いているのだ。

スイスにきた目的の一つが、この山を見たため(本当は登りたいが、無理)だったもの。それが今、ようやく実現しているのだ! といっても、その全容はまだ見ることができないが、それでも感無量だな。

これもガイドブックで知ったのだが、この橋上はマッターホルンの有名なビューポイントだった。

橋を渡って少し行くと、ホテル「レックス」は左手にあった。フロントの女性はパウチャールをみて、ぼくが泊するとわかると、「わあー、すごい」というしぐさ(これぼくの想像)して、鍵を渡してくれ、入口のところにあるキーボックスの使い方を説明してくれた。というのも、ここでは外出の際に、キーをフロントに預けるのではなく、このキーボックスにある小さな鍵を取り出して、代わりに部屋の

キーを入れて蓋を閉めるとボックスの鍵が閉まるようになっていた。キーボックスのナンバーは、部屋のナンバーでもある。この方式は面倒がなくていいと思った。

これはこの後のグリーンデルワルドのホテルでも似た方法だった。

係は鍵の説明の後、部屋まで案内してくれた。部屋は3階だったが、驚いたのは、部屋の天井が高いのと、部屋が広がったことだ。そういえば、このホテルは二つ星ホテルだった。

ヤナギランツェルマット近くで



たつけ。部屋はツインの部屋でベッドも広く余裕があるし、何よりうれしいのはバスルームとトイレが別々のところにあることだ。

バスルームとトイレと洗面所が一緒というのは、どうしてもぼくは慣れることができないのだ。これで、朝食付き1泊が1万1千円は、チューリッヒの狭くて、朝食無で1万4千5百円よりはるかに

安いな。

窓から庭を眺めたら、そこにはヤナギランが咲き乱れていた。日本ではこの花は標高千五百メートルから2千メートルぐらいの山に群生していることが多いが、ここツェルマットではホテルの庭に咲いていた。そういえば、ここツェルマットは標高千六百メートルほどであったのを思い出して、その一致が妙にうれしく感じた。

部屋で少し休み、その間に先ほど通りで求めた絵葉書に、孫の聖奈ちゃんにスイスの感想を書いた。さて、駅まで散歩がてら、スーツケースを受け取りにいこう。

ぼくはまたここでちょっと失敗をしたのだが、別にひとさまが見ていたわけではないから、別に構わないのだけどね。

エレベータでフロントまで降りるつもりでボタンを押して待っていたのだが、いつこうにエレベータがこないのである。おかしいな? と、思いつつ、まだまった。それでもエレベータが来ない。もう一度ボタンを押したが、エレベータは動く様子がない。そこでためしに手で扉を開いたら、エレベータの扉はあくじやないか、かごがそこにあった。ひょっとして、これって、さっきからここに留まっていたのではなかったのかしら。

乗り込んで行き先のボタン1階を押した。エレベータは動いて、目的階に到着したが扉が開かない。「やいやい、閉じ込められてし

まったか？」と、いささか焦った。だって、どうやって助けを呼べばいいのだ。適当な英語だって思いつかない。さて、困ったと思っただが、その途端思い出した。そうだった！自動的に扉は開かないのだ。

エレベータを降りたら、こんどは先ほどのフロントのあった階と様子が違う。あれ、1



階を押し出したのにおかしいな？それで、また思い出した。スイスでは1階は日本でいう2階のことで、日本でいう1階は0階だったわけ。このこと「日本の1階はスイスでは2階」

は、スイスに滞在中、頭の中でそのつど反芻しないとならなかつた。誰もいないからよいが、間抜けな失敗の連続だ。

日本のようになにもかも便利だと、そのことに慣れて(慣らされて)しまつて、それが便利であることすらも感じなくなつてしまつているのだ。社会生活のそここにアナログ

な部分(便利にすることができず、あえて不便のままにしておく)を残すことで、人間の感覚として、それが機械であることや、それがもたらす環境に対する影響などを時々は思い出すことが必要だ。などと、一人で漫画の世界を演じながら、負け惜しみに思った次第である。

さあー、いよいよ山へ出発だ！

駅へ行くついでに、明日はオーバールートホルン(3415m)へ高度順応を兼ねて登る予定なので、スネガまでの地下ケーブル駅を確認しておくことにした。

先ほどの橋の上では、やはり多くの日本人観光客がカメラの列を作っていた。マッターホルンが全容を表してくれるといいね。

今度は橋の下の道まで下り、川(マッターフィスパ川)の左岸に沿って歩いていく。途中ゴルナーグラート鉄道の鉄橋の下をくぐり、少し歩くと地下ケーブル駅は右岸側にあった。これを確認して、ツェルマットの駅に行き、チューリッヒで渡された半券を示すと係の人はスーツケースをすぐ渡してくれた。

翌朝7時、1階の食堂に行くと、まだだれもない。たしか朝食は朝7時からと聞いていたのだが……。でも朝食の用意はできていて、少し声を大きくして「good morning」と奥の方に呼びかけると男性が出てきた。も



のテーブルに座る。

男がコーヒーはいるかときいてきたので、「yes」というと、小さなポットに入った熱いコーヒーと、なぜか熱いミルクがたつぷりはいつた小さなポットも一緒に持ってきた。コーヒーと一緒にたつぷりのミルクというのはどういうことなのだろう。これはこの後のグリーデルワルトのホテルでも同じだったが、なぜ熱いたつぷりのミルクとコーヒーがいつしよにでてくるのか、いまだにわからないのである。

パンの種類も多く、スライスしたハムやソウセイジも6種類ぐらいあったが、朝の食事の内容が7日間全く同じであったことにはうんざりしてしまつた。初日の朝はリングゴを1個ポケットにいれて食堂を後にした。

(続く)

う食事をし
てよいのか
聞く「yes」
というピュッ
フェ形式で、
部屋の壁側
に並んでい
るテーブル
上にある料
理を好みで
皿にとつて、
他にだれも
いない食堂